
女医の彼（改編）

浅見 希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女医の彼（改編）

【Nコード】

N9741Z

【作者名】

浅見 希

【あらすじ】

妹を自分のせいで死なせたと思い込み、自分も妹の所に・・・
そんな麗子何故か女医にそれが、近道であると思い、女医になる。
何故なら医師ならどんな医薬品も自由になると・・・

女医になった！

そこへ昔大好きだった彼が末期がんで救いを求めて・・・

女医の彼 C a p - 0 プロローグ（前書き）

年内に 一気に投稿をと・・・

女医の彼 Cap - 0 プロローグ

女医の彼 Cap - 0 プロローグ

春の日差しが眩しい都心の公園。

麗子は2歳になる愛娘美樹と、

緑が少しずつ濃くなり始めた4月中旬の火曜日に、

美樹と親子の触れ合いを、親子である事を……

麗子が確認するためにやって来た。

その緑の芝に、バスタオルを轢き、

麗子は膝より3センチ程短めのスカートを揃えて、

少し斜めにすらりと伸びた脚を、伸ばし気味に腰を下した。

どう見ても、なぜかその姿は様になる。

だが、センスの良い紳士や淑女は、それを一瞬場違いな雰囲気を感じていた。

それは娘を……

娘に！ 注ぐ母親の様が……

その女性に娘がいる事を否定したくなるような……

そんな雰囲気醸し出している。

彼女は、愛娘に2倍以上の愛情を注いでいる。

そう、麗子は父親と母親の役目を果たしてるから……

時折美樹の視線を追うと、そこには両親にと言っか、

父親とその娘が交わす会話や、仕草甘えに見とれる姿に、

麗子は己の判断に心が揺れる。

“ いいの、これで！”

そう言い聞かせながら、いつもより少しきつく美樹を抱きしめてしまふ。

その内に、“ママ、私のパパは・・・何処にいるの？” “ミキもパパが欲しい！”

その言葉を聴くのがそんな遠く無い内に来る事を確信している。

その時の娘に返す言葉はきちんと用意している。

そう、彼女を生むと決めた時から・・・

—— Y Y Y ——

Y Y Y ——

女医の彼 Cap - 1

女医の彼 Cap - 1

ある朝、麗子は起きた時から言われぬ不安を感じて、小学校へ友達と向かった。

そして、その日は学校の都合で直ぐに帰宅を指示された。

麗子はその言葉に、心が弾んだ。

幼い思いつきで！

直ぐに。

そうだ・・・麻由美と遊べると、心がうきうきして帰宅を急いだ。

「あら、どうしたのこんなに早く？」

家に辿り着くなり、母親の声が麗子の耳に届いた。

「麗子、丁度良かった、！」

「法子ちゃんの面倒を見て頂戴！」

わあ・・・私・・・麻由美と遊ぶ約束をしていたのに・・・

でも、その言葉に従わなければならない状況は直ぐに察した。

「はあ・・・い！」

しぶしぶ承諾した。

麗子は小学１年生、そして妹の法子は５歳。

来年は二人して、小学校へ行くはずだった。

麗子は直ぐに閃いた。

麻由美ちゃんと、遊ぶ約束をした公園へ妹の法子も連れて行くことで、

麗子なりにこれで、２つの約束を守れると、いい考えに納得した。

「のりちゃん、早くして！」

「えっ・・・何処に行くの？」

「これから公園に行つて麻由美ちゃんと3人で遊ぶのよ！」

「わぁ・・・やった！」

「やった！ ラッキー！」

これは、妹にとって思つても見ない幸運だった。

のりちゃんにとってはとても嬉しい一日になると思つていた！
のりちんの気持ちはいっぺんに心が晴れた。

麗子は、法子を連れてその公園へ向かった。

だが、その公園に行くのには二人にとって、大きな難関があつた。
日頃からその道路を越えて遊びに行く事は、両親から禁止されて
いた。

少し前に、その道路で幼児がひき逃げにあつたばかりだった。

だから、それはあの両親の言いつけを破る事になる。

公園へ向かう途中その道路の前で、

すかさず妹が姉の麗子に咎める様に言った。

「ねえお姉ちゃん！」

「ここは、ママが通つてはいけないと言つてたわ！」

法子は、真面目に母親の言う事を聞く素直な自慢の娘だった。

「でも、約束したの！・・・私！」

あの公園で麻由美ちゃんと遊ぶ約束・・・」

もう・・・そうなのだ。

いつも法子は、融通の利かない母思いの優等生なのだ。

「ええ・・・でも！」

法子は困つた様子で誘惑に負けそう・・・

「じゃ、のりちゃんは家に帰れば！」

麗子は咄嗟にその言葉が出てしまった。

「やだぁ……」

そう言った後から、法子の目に涙が溢れていた。

「わかった、ちゃんと注意して渡るから、信号青になったらね！」

「そうだよね！」

「お姉ちゃん……それなら大丈夫だよね！」

お父さんは海外出張が多い。

母親はその事で何故か子供に時々きつく当たる。それもどちらかと言うと麗子のほうが断然多い。

それは、麗子が大人になって大人の事情がわかる頃になって知った事だ。

私達は実質三人で暮らす事が多かった。

そして母親は、何故か家を留守にする事が多かった。

母親はおそらく、家事に向かない女だった。

いわゆる、キャリアウーマンなのだ。

どうしてこんな二人が……パパとママが結婚したのか……

それが後になって一番不思議な事だった。

麗子は法子の手をいつも以上にしっかりと繋ぎ、目的の公園へ向かった。

それは、横断歩道を青から黄色に変わる少しのほんの一瞬の出来事だった。

一台のワゴン車が二人の前に立ちはだかり、幼い姉妹は跳ね飛ばされた。

麗子は大きな鉄の塊に吹き飛ばされ、意識を失った。

“法子……大丈夫、法子！！”

当然法子も道路に跳ね飛ばされた。

“のりちゃん……大丈夫！ ゴメンね……のりちゃん！”

何故かそう言ってる自分がわかる。
おそらく透明な世界に近い場所で！

その透明な世界で、私と法子を呼んでいるような気がした。
その声は聞き覚えがあった。母親の声だ。

呼ぶ声は何故か法子を呼ぶ声が多いような、そして激しく泣き叫ぶ声が・・・

それは・・・法子を呼ぶ声が圧倒的に大きいのは何故か・・・
その答えが、わかったのは少しずつ自分の記憶が透明な世界から、
白い世界に近づいているのが原因だと理解した。

そう、私は比較的軽症で、医師が私の命には別状がない事を保障した様だ。

それに引き換え、妹の法子は瀕死の状況だと言う事が、
医師から伝えられていたからだろう。

法子は、頭部の損傷が激しく意識不明で、
あらゆる生命を維持する装置が装着され、
それが・・・後で思った事だが危篤状態にあり、
もの凄く大変な事だと言う事が麗子の目に深く刻まれた。

そう、私は少しずつ意識を取り戻したようだ。
目が開けられそうなので薄目を開けた。

だが恐怖で直ぐに目を閉じ、そのまま今の状態を維持した。
そうしないとんでもない事になるような気がした。

医師は完全に私の今の状況を把握しているようだ。
そして母親もそれに気づいている。

大変な事をしてしまった。
私がママとの約束を守らなかったから・・・

それで、のりちゃんが大変な事に、そう死んでしまっ
きつとそうなのだ！

二日後にのりちゃんは死んだ！

わけのわからないまま、時は流れ過ぎた。

のりちゃんは冷たくなってしまい、もうずっと、息をしていない。
白く綺麗になり、動かないお人形さんのように・・・
のりちゃんは、最高のお気に入りワンピースを着せてもらい、
お化粧をしてもらった。

大きな白い箱に入れられて、蓋をされた。

母親はもう泣きすぎて、涙が枯れてしまったはずなのに、
それでもずっと泣き続けている。

そんな母親を何故か可哀想に思った。

原因は自分が作ってしまった筈なのに・・・

C a p - 1 F i n

では、後ほど 浅見 希

女医の彼 Cap - 2

女医の彼 Cap - 2

母親も父親も自分を見る目がとても冷たく感じた。

自然と涙は出るが、それは法子が死んで悲しいと思うよりも、両親の刺すような目線で、泣いていたのだろうか・・・

周りで親戚の人たちがすすり泣きながら、

「ああ可哀想な子だ、のりちゃんは！」

「あんな可愛らしい子が死ぬなんて・・・」

正に、悲劇のヒロインそのものだ。

あの頃の自分は、悪い事をした。

自分のせいで法子を死なせた。

それは、幼い頭でも、心でも、しっかり理解していた。

黒い地味なワンピースを誰かに着せられ、

斎場へ向かう車に乗せられ、

法子の小さな骨を拾った。

誰か大人の人と一緒に・・・

その小さな灰白質のそれが強く印象に残っている・・・今も

人が死ぬと、焼かれる。

そして天国へ召される。

なら・・・私も・・・そっちの世界がいい！

それを幼い脳で、体で考えていた。

今も引きずって生きている。

法子が死んだのは自分のせい。

それが事実で当たり前な事と・・・

それを、ずっと背負って生きて行くのだと・・・

そっちの透明な世界は、きつといい世界なのだろうと・・・

あのつらい目線、視線を感じるとそう思っていた。

母親は半狂乱になっていた。

特にその変わり果てた姿を見て一層に・・・

傍で父親に縋る様に泣き崩れ・・・

そのまま気を失った様だ。

その倒れる様を間近で見ていた幼少の自分。

黒い細い影を照らす無機質な照明

オペ室の無影灯とは対照的な照明だ。

その陰影は麗子の脳裏に刻みついている・・・今も

いつそ、私を叩いてくれたほうが楽なのに・・・

そして泣きたかった、泣き崩れたかった、

幼かったその時の、私の心も体も

「法子ちゃん？」

呼んでも、妹は、ぴくりとも動かなかった。

こんなにも永く、こんこんと眠り続けるからには、

もしかして酷い病気・・・

「それとも、まだ眠いのね、のりちゃん」

冷たくなった身体は、暖めてあげよう。

そう・・・私がとなりでいっしょに寝てあげよう・・・

そうすればきつと・・・

レエコねえちゃん大丈夫、私は寂しくないわ、安心して！

額から冷や汗が垂れ、目に凍みた。

あわてて汗を拭った。

そして気づく、あの過去の事だと・・・

あっこれは夢、夢なのね、法子・・・心配してくれるの？

あれから母親も何も言わない。

そして法子の一周忌が過ぎたある日、居なくなった。この家から！
幼かった私をおいて・・・

何故・・・なんてその時は考える事は無かった。

理由は後で知る事になったが、どうやら法子を失った寂しさと、
それを紛らわすために男の下へ・・・らしい

そして、その男との関係は法子が死ぬ前から続いていたようだ。

私は知らなかった、様々な事を・・・

母親は、私を置いて去った・・・どうして？

それも後になって知ることとなった。

決定的な事実！

それは、私を追いやる・・・別の世界に
どうやら、本当の・・・産みの親が私には居るらしい事を！

それで、半分以上がわかった気がした。

私の幼少の暗い過去が・・・

父親も私には冷たい存在だった。

おそらく愛情の欠片も無かったのではと、思う・・・強く！
なぜなら、麗子は呆然とした、あいつのやり方に。

そう、非常な手段が私を待っていた。

私にとって、2つの大きな心をズタズタにされた事件のそのすぐ後に、

役場の人間と父親は何やら話をしていた。

そして、父親は私を育てられないと役場の福祉課の人間に、言い切った様だ。

結果として私は、施設に預けられた。

でもそれ程寂しさを感じなかった。

きつと・・・感じなくなったのだ。

それから、すつとだ。

幼い私の心は、幼いなりに荒んでいたのだろう・・・

でも平気よ・・・

私には誓った事があるから・・・

この時点から、私の記憶は曖昧にぼやけばらばらに散乱している、今も。

確実に刻み込まれているのは、母親の無言で真っ黒な瞳だ。

その瞳が時折、私を引き寄せ胸に抱いた。

それは、唐突で強いしめつけられるような痛みだけが・・・残った。

それは、母親の大きな憎悪と、ほんの少しの愛！？

父親の愛情なんて欠片も見たことが無い、感じたことも無かった。

そして、これから・・・

ずっと無いだろう。

いいのよ、これで・・・

C a p - 2 F i n

では、後ほど 浅見 希

女医の彼 Cap - 3

女医の彼 Cap - 3

あの日から25年が過ぎた。

もし私が、今でもしろい建物、そう・・・病院の門をくぐれません。と、涙ながらに告白したなら、それはどんなにか絵になることだろう。

しかし、あの日の病院の建物、白いコンクリートの無機質な光景を、今は、別な角度で毎日見ている。

と言うより、ほとんどの時間をそこで暮らしているような物だ。

何故なら、そこで白衣を身に纏い働いているのだから。

今日も、一人の労働者は、まずトーストを焼きながら、インスタントコーヒーで、

そのカフェインで疲労に満ちたよれよれの脳細胞を叩き起こして、蓄積した疲労をごまかし、あとは当座のエネルギーとしてトーストを頬張り、

一緒に数分とにかく胃に納め、朝食とする。

振り返らず、小走りで駆け出すのだ。

そして仕事から戻れば、アルコールで、たかぶった神経を鈍らせる。バスを使うのも億劫で、ついシャワーだけでバスルームを後にする。そのままベッドにへばり付く様に眠りに堕ちる。

そして、また同じ朝が来る。

冷めるまで待てないコーヒーを一口することに、一枚ずつ衣服を

身に着ける。

こんな格好を、到底彼には見せられない。

ふと思う、私は女・・・女性のはしくれ、そのはずだと・・・

今朝も、ブラ、パンスト、ブラウス、スカートを身につけ、

その間に、トーストに薄くスライスされたハムを挟み、今日をこなす為に口へ運ぶ。

テーブルにおかれた皿の上にペーパータオルを被せ、皿を洗うのを惜しむ。

そして、テーブルを拭くのも最低限に済ます。

麗子の視線は、紙面を素早く追う。

結果として、味覚は、ほとんど無視されている。

しばしば、ベッドの中で目覚めているのかどうか怪しい時に、

あの日の情景がずっと私の脳の記憶分野を占拠する。

平気よ、今の私は、そう待つ人も、待っている仕事もあるから・・・

・

あの日の思い出は、閃光のように突然に麗子の心、意識を貫き駆け抜けるけど、

もう、私を傷つけはしないから・・・

記憶は安全パイでしょ。決して過ぎた時間ときは戻らないでしょ！

そうよ、命を落とした妹が、二度死ぬことはないから。

出勤時間の1分前、等身大の映る鏡を見て、OKね麗子！

“行って来ます！”

誰もいない殺風景な部屋に挨拶する。

玄関の靴箱から、お気に入りのワインレッドのハイヒールに、

自分でもすこし、お気に入りの長めの脚をスリリと滑り込ませる。

エレベーターまでの赤い絨毯をゆっくりと気取って歩く。

それが、今の僅かな幸せを感じる時間だ。

仕事先までは、これから地下駐車場の車で通勤ね。

愛車は真っ赤なフェアレディZ Z33ロードスターバージョンS
T

自分にご褒美として、1年ほど前に“良く頑張ったね”で買った。
勿論ローンが半分残っている。

車での通勤なので、時間に余裕を持って出かける。

地下駐車場から5分も走ると高速のインターがある。

通勤時間もラッシュの方向が、逆になるのでストレスは感じない。
およそ20分高速を走り一般道に降り、5分程で職場に着く。

そこが私の仕事場だ。入院施設もある。

中程度の手術も行っ。

状況をわきまえた80床の病院で医師は私を含め5名。

私の唯一の息抜きとしての楽しみはドライブ。

その時は勿論アルコールが不要になる。

それは、アルコール以上の安らぎを私にくれる、

“つかの間の癒し”を得るために、

スポーティーな車・・・時には我武者羅に真夜中の首都高、で脳内
洗浄。

そして時にはしつとりと、人里離れた古都で、脳のリフレッシュを
可能にする。

それが、真っ赤なあいつなのだ。

それが許されるのは、まあ年に数回ほどだけど・・・

この病院は在宅医療も訪問看護も行っ。

そうせざるを得ないのが現状だ。

病状の安定した患者は、出来るだけ速やかに在宅・訪問看護に移行

する。

それを怠ると直ぐに病院経営は苦しくなるのが現在の医療制度だと
いつも院長は言う。

ひどいもので、同じ医療を施しても2ヶ月3ヶ月と患者が長期入院
になると、

報酬額が70% 50%と、どんどん減額される仕組みなのだ。

とにかく早く患者を退院させることが、病院経営を逼迫させない唯
一の方法、

なのだから患者側としてはたまったものではない。

その為、当番制で訪問看護・在宅医療で往診を行う。

勿論訪問・在宅看護で往診に出かける時は病院車を使う。

駐車場のエコカーは勤務先の所有で、ホワイトのボディーには

（在宅医療・訪問看護川村病院）と両サイドに青字でペイントされ
ている。

他に必要な時は応援を要請できる非常勤の専門医も、数名登録され
ている。

ホスピスを退職した川村淳司が、親が切り盛りしていた病院を継ぐ
ことになった。

気心の知れた師長を前の病院で引き抜き、訪問看護ステーションを
併設、

それと連携する形で協力し合う形を作り、ようやく3年目に入った。

だが経営は決して楽なほうではない。

いや赤字が続き院長など給料は食べる位しか、手にしていないだろ
う。

事実、雇われの身の方が高給取りになっているのが現状だ。

くたびれたドクターバッグは看護師に持ってもらい、
カルテ類等、書類の入ったファイルを麗子は手に持ち、

麗子の運転で患者の下へ向かう。

今日の仕事は往診という名の訪問看護、在宅看護として、外に出るのが仕事だ。

助手席に看護師を乗せ、いざ出発となる。

看護師の名は吉沢里美 45歳 ベテランだ。

現在のような仕事内容は、なだめられ納得しているつもり！
始めはそれに、いくらかの抵抗があったが今の医療制度を、
院長の川村に聞かされ、現場を見て納得している。
はずね……でも少し不満はあると言うのが事実だろう。

川村病院は、近在の大規模病院やホスピスと協力し、
慢性期や末期の在宅患者も支援している。

往診を請け負ってくれる医師が見つからない！

との求めに対応するうち、いつの間にかカバー範囲はかなりな範囲
に広がった。

だが移動距離と訪問件数は増えても、カーナビを導入する余裕は生
まれない。

おかげで麗子は、この辺の地理ではタクシーよりも、
最短距離を選ぶほどに、道に詳しくなった。

C a p - 3 F i n

では、後ほど 浅見 希

女医の彼 Cap - 4

女医の彼 Cap - 4

今日の麗子は遅出で、通勤ラッシュが収まった午前10時の道路には、

運送業者のトラックと、安価なモデルの白いボディーに、社名を塗装した商用車が目立つ。

女性の運転と見れば、露骨にあおって見たり、割り込んでくる、せっかちな男性ドライバーもいるが、この車で嫌がらせに遭った事は今の所無い。

信号のない狭い交差点に入る。

予期したとおり、宅配便のトラックとタクシーが先に停車して譲ってくれる。

川村病院 と描かれた車は特別だ。

多くのドライバーが人を救いに急ぐ車、とでも思うのだろう。

そんな誤解をくすぐったく思いながら軽く左手を上げ、アクセルを踏んだ。

残念ながら、私はそんな役に立つ人間ではない。

25年前のあの事故の現場、そこで私が寄り添っていたのはまぎれもなく、

瀕死の妹だった。

妹の死を知らされて、あの時すぐに私は泣いただろうか？

そもそも一体どのようなにして、妹はどうやって病院へ運ばれたのだろう。

少しの時間が抜けている。
でも事実は把握している。

あの時信号は青、それが点滅を始めた。

そして、走った3人で……

それから……

ああ、頭が痛い……あつ始まった……いつも強烈な頭痛が私を襲う。

これは肉体的障害では無い事は麗子自信が良く知っている。

5歳だった妹は私の後を、手をぎゅっと握って……

私の手から妹の小さな手が離れた。

私の記憶の中では確か、彼女が自ら振り切って……

それから……

強烈なブレーキ音、……そして衝突音が……

ああ……だめもう止めよう……

“何故、どうして麗子は私の言うことを聞かずに……”

“麗子が……殺し……ようなもの！”

頭部打撲による硬膜下血腫だ。後にその様な病名を聞かされた。

もうい脳組織と、それをしっかりと包んでいる硬膜という白い膜の間に、

鉄の塊で強烈な打撲、挫傷、挫滅……

いつそ骨折して多量の出血があつたら……

助かった可能性も！

頭蓋内の切れた血管から流れ出る血が貯留する。

血のかたまりは、硬い頭蓋骨が制限された容積の中で徐々に大きくなり、

やわらかな脳を圧迫し始めたのだらう。

今思えば頭蓋内圧亢進だ。今の現代医療ならきつと……

救えた！ 私でも！？

その後の後遺症の有無は別として・・・

妹は、眠ったのではなく昏睡していた。

死に瀕していたのだ。

まるで安らかに眠るように・・・

大人になった私は、もう何度も、これまで身につけた知識とともに、あの現場へ立ち戻ってみた。

どんな錯誤をしているの貴方・・・

“貴方はあの時8歳でしょ！ 馬鹿げた思考回路はストップしな！”

妹の命を救う方法は、少しでも早い開頭手術しかない。

頭蓋骨に穴を明け、血液で圧迫された脳を窮屈さから解放し、滞っていた血液の流れを一刻も早く回復させる。

そして硬膜を切り開き、溜まった血液を素早く吸引処置を行う。

無影灯の下、頭を開かれた妹を見下ろす、32歳の自分がいる。

何故かたったひとりで、大きく広がったゼリー状の血を除去している。

アザリン クリムソン色の血腫は、いくら取り除いても決してなくならない。

私では、法子ちゃんを助けることができない。

詰め込んだ息をふうと吐き、なかなか変わらない目の前の赤信号から目をそらす。

他人の家から、また別の人の家へと、死に近づきつつある患者の許から、

長く患うとわかっている次の人の枕辺へと、狭い空間に閉じこもり移動すること考える。

私はなぜ、まだ死なずにいるのだろう！
なぜ明日へ行くの？明日が来るの！？

短いクラクションが、前進しろと促す。

目を上げると、信号から血液と同じ色が消えていて、
その向こうに、なだらかな丘の緑豊かな丘に、低層の建物が見える。

川村のかつての勤務先は、日の光を受け白く輝いている。

緑の丘陵には、下から順に、市民農場、市民植物園とホスピス、
そして高校の野球グラウンドが2面並んでいる。

廃工場の入り口前には排水路があり、渡された短い橋に差しかかる
その少し先に、

ずっと前から修理を必要としている道路は、その窪みの段差で車が
大きく弾む。

弾んだ瞬間に一瞬あの記憶が蘇る。

格別大きな衝撃では無いのに、妹の顔が脳内をちらついた。

私はぶるつと体が震えた。

まだ引きずっている。

いいえ、あれは私のせいでは無いでしょ。

そうよね！・・・法子ちゃん。

当時の私は、まだ5歳だった妹と私との母親の接し方が、
何か違う気がしたが、鈍感な私は特に気にしなかった。
そう・・・姉と妹の年齢さ位にしか感じていなかった。

死ぬために、私は医学部へ通い、それを学んだ。

妹を失ってからしばらくは、見知らぬ大人達（おそらく遠い親戚）が、

入れ替わり現われては、拷問のような質問を浴びせ、干渉し、心にもない言葉で“気の毒ね”と涙を浮かべ、あるいは疑いを隠さず、

敵意を覗かせ、泣く泣く彼らの相手をするだけで、

あの時は幼いながらにそう、子供としての対応をしたと思う。

そして、その騒ぎが収まってようやく、私は、

ひとりぼっちで取り残された事に……

気づいた。

法子ちゃんはどうもないのだ。

決して逢って話をしたり、喧嘩をしたり……出来ないのだ。

あれから私は苦痛の日々は過ぎた。

そして思った。

そう……不覚だった。

それは、新幹線に乗り遅れた気分だった。

自分もさっさと死ぬべきだと思った。

けれども8歳の私にとって、死とは、

想像を絶する苦痛そのものであると思った、

苦しまず死ぬ方法など知るよしもなかった。

私は父親の決定で結果として施設に暮らし、学校へ通い、翌年には、森山医院の養女になった。

Cap - 4 Fin

では、後ほど 浅見 希

女医の彼 Cap - 5

女医の彼 Cap - 5

ある日、そんな私に入れ知恵をしたのは、

病院に出入りする製薬会社の、数少ない女性プロパーだった。

「苦しまずに死ぬ方法は？」

と、問う9歳の子供へ、興味と、秘密感を得意げに！

それと、数多くのその方法と知識を、少女相手に熱弁をふるった。

彼女は、レクチャーの最後をこう結んだ！

「ドクターなら簡単よ！」

「なんでも手に入るわ！」

「自分でやれるんだから！」

「全ての・・・決断をね！！！」

「どう・・・貴方にも解るわよね！」

蝶や蜂が訪れる、たくさんの綺麗な花で埋め尽くされた植物園を横目に、

一台の車が、ホスピスの正門に入る。

ここを訪れると、途端に私は、死について考えるのが嫌になる。

余りにも相反する考えが交差して・・・

よく手入れされた庭をぐるりと一周して、駐車場の奥へと車を進める。

職員用の、建物から離れた区画に、ウエイトトレーニングを、する男の姿が見えた。

すぐ上にある野球練習グラウンドから、ボールが転がり落ちてきた。

「おう、元気！」

車から降り立つ私に、当病院院長の川村が手を振る。いつもその行動で、元気をたくさんもらう。

そして、明るい声で私の名を呼ぶ。

白衣は、夏場は暑苦しいからと、その下はほぼ1年をとおして同じだ。

時折、Ｔシャツからワイシャツに切り替える時もあるが、それ程大きな違いは無い。

彼の姿を見る限り、季節なドアのかと錯覚しそうだ。

四季を感じる事など、無いかのように思える。

仕事と金策に追われて、そんな余裕も吹っ飛んでしまうのだろう。彼は忙しい、とても！

全てにだ！

「私のことより、自分の身体を心配してください。」

「一睡もしてないんですよ？」

「ああ！」

とだけ川村は答え、私の顔は見ずにそのボールを壁に投げつける。

およそ、ひと晩中患者につき添っていた人間とは思えない。

「よかったわね！」

「あの患者さん持ち直してくれて！」

バットを持ち素振りを何度も行う。

時折空気を切る音がする。

素振りを止めて、川村が笑顔を浮かべる。

昨夜、このホスピスに入所している末期癌患者の容体が急変し、在宅治療をしていた時分からの主治医である彼が、いつもの様に呼び出された。

ひとりの患者が、自宅からホスピスへ移る場合であれ、その逆にホスピスから家へ戻るケースであっても、ホスピスと病院それぞれの担当医が継続してふたりで診る。その様な形で連携しているためだ。

ターミナル（末期）に至った患者は、気心の知れた医師と気持ちが繋がっていれば、例え治療の場が移っても患者の心、体の負担は相当軽減するし、何より安心を得る事が出来る。

「ねえ・・・！」

「バットなんか振る暇があったら、中で待ってればいいのに！」
「眠気覚ましだよ！」

徹夜明けで車を運転しては危険だからと、昨日は、私が彼をここまで送った。

そして、直接病院へ出勤したいという求めに応じ、いつもの遅番の日より、一時間も早く出て遠回りして、迎えに来たというのに、こんなにぴんぴんしているのでは・・・、拍子抜けだわ。

「貴方・・・“疲れる”、という言葉を知ってる？」

「元気でいたら気に入らないのか！」

「あなたと契約する立場としては・・・」

麗子は少し躊躇しながら・・・

「まあ、頑丈な方がいいかな！」

少し苦笑いの麗子が答えた。

「堅気の皆さんはそれを、“結婚”って呼ぶんだぜ！」

「契約では内と・実がそのままむき出しだぜ！」

軽快な笑い声をあげ、川村は、相変わらずバットで素振りをするが、しかしそのバットがすっぽ抜けた。

「あつ、しまった！」

「ほら・・・疲れてるからよ！」

その言葉に、素直に笑っている。

負けずに言い返す。

「麗子がじつと見ているから、動揺したんだぜ！」

「人のせいにするの！・・・へえ？」

「あと少して50になる、“おとな”のくせに！」

「まだ4個ある！」

飛んだバットをのんびりと歩いて取りに行く。

その姿を麗子に見られてはつが悪そう。

「どうしてそんなにむきになるの、考えなさいね！」

「今の貴方の現状を・・・」

「・・・！！！」

川村は両手を広げて降参のポーズをした。

バットを追いかけて少しヒヤツとした。

バットは、がらがらの駐車場の中央を転がり、

きちんと並んで駐車されている入所者用専用の、

スペース近くで止まった。

そこには普段見慣れぬ車が止まっていた。

それは、古びたVWシロツコの前だ！

「えっ・・・」

だが私は、その濃いシルバーメタの車体には見覚えがあった。

学生の頃、そっくりな車に乗る男を私は好きだった。
男はピアノ科のマスターで在籍中に、一言も無く突然私を置き去りにして……

7月のある日、ポーランドへ渡欧してしまった。
そのままポーランドのある、音楽学校へ留学した。

そしてその年の11月のある日、何もなかった様に私の前に姿を現わした。

どんな目的だったのかしら……、
僅か20時間後、再び私の前から消えてしまった！

“シヨパンの弾き手”だった彼が懂れていた奏者の名は、
どんな名だったろうか？

それは……確かアルカディ・ヴォロドスというロシア人、
ではなかったろうか。

彼は、指導者と演奏法について対立して、学内に大きな波紋を起し、

大論争の末、自ら大学のピアノ科を去った。

その後、彼に同調してくれた僅かな教授の一人の口添えを得て、
欧州でその志を貫くことを決めた。

その話を、彼の友人が知らせてくれた。

それが……最後の消息だった……はず！

「君への伝言？」

「すまん！」

「何も……わるいな！」

そう言って、さっさと待ち合わせの喫茶店を後にした。

C a p - 5 F i n

では、後ほど 浅見 希

女医の彼 Cap - 6

女医の彼 Cap - 6

医学部で6年目を迎え、目が血走っていた私は、あいつよりも国家試験の準備を選び、あいつを捜そうとはしなかった。

それは、あいつの意思でもあると確信した。

ぶざまなことをして、失望させられなかった。

それは、麗子の僅かに残るプライドという名の見栄だったのかも・

だがそれからの日々は、麗子の生活は不安定な毎日だった。

あの確信とは逆に、彼がふらりと現われる日を、何故か期待している自分が、傍にいた。

今となっても時折、未練が・・・

来るはずの無い郵便受けに絵葉書が、

来るはずのないメールがパソコンに、

前触れもなく忍び込みはしないものかと・・・

期待する自分を・・・

馬鹿なオンナね！ と心で笑う。

喫茶店のドア、

信号待ちの道向こうの人の群れ、

海外の空港ですれ違う旅行者、

電車が過ぎたばかりの隣のホーム、

高速で、一般道で・・・あの型の車に似たのを見ると、

つい加速して確認をする麗子

“ 何してんの、この未練たらし！”

“ 泣いたら・・・、叫んだら・・・ ”

“ それとも行く！ 全て捨てて・・・ ”

“ 出来るわけないわよね！”

“ あんたには！！！”

どうせ、逢ってもすぐに別れる筈だしね！

そして、予告もなしに物陰から現われ、

少し離れたところでこちらに気づくと、

きつと、昨日までいっしょに居た様な顔をして、

気安すく声をかけてくる。

そんなやつ、あいつは！！

外の明るさとは一変して、廊下が蛍光灯で寂しげに光る床を抜け、年代を感じさせる玄関の方から一人の男が歩いて来る。

その男と、ボールを拾いに走る私と約束した人！

そのツーショットを、私の視線はワンショットでそれを捉えていた。その片割れが言う。

「へえ、野球選手とつき合ってるんだ？」

立ち止まったハルは、濃いシルバーメタの車に背を持たせて言った。その目線は私ではなく、川村を見つめている。

その横顔は、8年前よりずっと精悍さを増していた。

「オット、これは失礼！」

「まだ衰えるわけにはいかんだよ！」

「・・・・・・・・!!」

「近いうちに、試合をするんだよ!」

「格好良いところをね!」

「この野球チームで、忘れていた夢をときめかせる……」

「マイホームパパ……かな!」

「おい、いつの間に結婚なんかしてしまったんだ!」

ハルが、私を見て半分真剣半分冗談で言う。

「えっ……!!」

私は、言葉を失った。

「麗子、それはお前にとって、およそ賢明な行動とは言えないな!」
「ちよつと待つてよ!」

「私はまだ独身だし、貴方から“賢明”だなんて褒められてもね!」

“おまえは、馬鹿だね!”と言う言葉なら聞きなれてるけど、
と少しつんとして、ハルに歩み寄った。

彼は、同じ姿勢で毒舌を吐く。

「国家試験……、滑ったの?」

「相変わらずね! もう研修医も済んだけど!」

「へえ……偉いね!」

「そう、偉いのよ! 私は!」

ハルは、その言葉を?み込み……

「それでは、美人先生じっくり診察してもらいたいものだね!」
そう言つて、ニヤつと笑った。

「なあ……麗子!」

「何よ、馬鹿にして……」

「やつと遭えたんだから、これから飲みにいかないか?」

「休診にしてさ!」

「相変わらず、無理言うのね！」

「まだ私を待っている人で、私はリザーブ済みよ！」

もう、相変わらずハルはいつものマイペース。

調子を合わせて反論し、それから戸惑う。

今までの成り行きに満足したのか、ハルが目の前で笑っている。

「まさか？ ここにいるハル、あなたホンモノ？」

心の言葉が声に、そしてその言葉に、

「ニセモノだったら、マジでデートの誘い・・・すると思うのか？」

ハルは可笑しそうに応えて、そのまま目をそらす。

麗子が近づいても消えない！ 屋気楼とか幽霊とは明らかに違った。

そこへ、飛んだバットを手に持って近づいて来て、

「割り込んで申しわけないが！」

それは聞き慣れた声で、至近距離から麗子に響いた。

驚いてそちらへ注意を向けると、

「僕は野球選手でもマイホームパパでもありませんがね！」

空気が・・・一瞬違うと感じた彼は言葉を続けた。

「どうやら・・・その・・・なんだか退散した方がよさそうだな！」

明らかにこの空間に、浮いた存在でお邪魔感が沸騰中である事を、実感している川村が、ハルのすぐ脇に立ちすくんでいた。

不覚にも婚約者の前で・・・我を忘れて・・・

「ごめんなさい、私、急にハルが涌いて出たからびつくりして！」

何とこの数分間、私は、ハルしか見えていなかった。

マジイ・・・

しかし、流石はどん底、死線を上手く切り抜ける、

熟練医師の手腕が言葉を繋いだ。

C a p - 6 F i n

では、後ほど 浅見 希

女医の彼 Cap - 7

女医の彼 Cap - 7

「森山さんのご友人ですね！」

気にさわった風もなく、私の婚約者が右手を差し出す。

「・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・！」

？まれたか、ハル！

「川村といいます。彼女の同業者です！」

それに反してハルは、長い両腕をだらりと垂らしたまま、その手を見つめ、小首を傾げ、反撃だ！

「わるいけど、左利きなんですよ、俺！」

負けじと、目を細めて睨むように、川村の全身を冷たく観察している。

そこで、私は言葉を発していた！

「ハル、ふざけないでよ！」

ピアノを弾く彼は勿論両手を器用に使う、

そしてハルの生活上の利き手は右だ。

しかし、大人な川村は・・・

「それでは左手で」

手を差し替える川村に、ハルは第1ラウンド負けね。

彼の心、精神力、忍耐力は、20数年以上、患者の生死を、見続けて来たそんな彼には赤子同然の相手でしょうに・・・

「ありがとう！」

さすがの、ハルも完敗だわね。

鋭利な刃物が無残に折れ、ひねくれた根性は音を上げた。
素直に小さく言って、ハルが左手で握手をする。

きつと、はにかみを隠しているに違いない。

贅肉のまるで無い首筋が、突き出た喉仏が上下した。

私はハルの癖や、心・体の動きのサインを、私は忘れていなかった。

「ハル、川村さんは私の勤め先の院長なの！」

素早く院長は自分の名刺を渡す。

「それから院長、彼は、武藤晴樹さん！」

「仕事は・・・ピアノスト？」

私は確認するように紹介する。

今度は、ハルが続ける。

「欧州を中心にたまにアメリカで細々とやってる。」

「ほかに取り得はない！」

「そうね。ピアノは、あなたにとっての唯一の正義」

「ほう、俺にも“正義”があつたつてわけだ」

ハルが、私の前で初めて見せる表情で笑った。

それは中途半端にほころんだ口元と、ピントのぼけた、

何処かを彷徨っているような瞳が、あらゆる、過去の軌跡を潜り抜けて、

やっと出口が見えて来た。

そんな印象を感じさせた。

ハルは老いた、10年以上いや20年以上もか・・・、
という感慨が兆した。

麗子は、無意識にハルから慌てて遠ざかる。

私はまだ充分若い。

彼も若いはずなのに・・・

それは．．．彼が、少しやせただけだ！．．．きつと！

ハルは、私が口を開くの待っているようだった。

しかし私は、ハルとの時間の隔たりを身を感じた瞬間、すべてを意識した途端、いつの間にか、話しかける術を見失っていた。

一方のハルも、だからと言って、

彼から視線をそらすこともできない。

「なんだか気まずいですね！」

しかし、最初に口を開いたのはハルだった。

もうひとりの男に向かい親しげに語りかけた。

「川村院長、今日はお会いできて嬉しかったです！」

「仕事の邪魔をするのは生に会わない。これで失礼します」

濃いシルバーメタの車へ細く長い身を、滑り込ませるように入り込んだ。

そして、そのまま麗子を振り返らずに走り去った。

再会を喜ぶ言葉ひとつさえも、記憶が脳内に転写する一瞬ですらすらも、

私には与えてはくれなかった。

私は、彼の携帯の番号は勿論、メールアドレスさえ手に入れている。まま・・・

「僕が余程お気に召さなかったらしいね！」

「……えっ！」

「年……取ってるからかな？」

決して、そうは見えないはずの川村が咳く。

「それじゃあ……残された私達は、クラシックカーなの？」

去っていくVWシロッコの排気ガスに巻かれ、まさに煙に巻かれた格好で、

手持ち無沙汰に二人並んで立っていた。

「ところで彼、武藤といったね！」

川村のいつもの青いTシャツが、私を現実の世界へと引き戻す。

8年前の瞬間へ通じる道が、先ほどの一件で突然閉ざされた様に感じた。

「ええ。武藤晴樹！」

「そうか！」

それを聞いて、院長の顔が・・・、川村が曇った。

「どうしたの？」

麗子はまた現実に戻された。

すかさず不安が脳裏を過ぎる。

何・・・？ 何が彼の身に・・・

そう言えばかなり痩せていたハルの体。

「いや」

それきり考え込んでしまった彼をうながし、車に乗り込んだ。

病院でのミーティングが済んだら、患者の診察、

そしてその後、2件の往診を控えている。

我々医師は、目の前にどんな事があるかと患者に背を向ける事無く、まず、患者に目を向け診療行為を行わなければならないのだ。

「いいか！ 君はうちのスタッフだ！」

無言で車を発進させると、川村が口を開いた。

「えっ・・・何それ？」

「君”・・・”って言い方、初めて聞いたわ、そんな改まった言葉？」

麗子はじつと前を向いたまま訊き返した。

C a p - 7 F i n

では、後ほど 浅見 希

女医の彼 Cap - 8

女医の彼 Cap - 8

何か・・気になることでもあった？

「えっ！そうか・・・彼！！」

「まさか・・・警察にでも追われてる・・・！？」

最近忙しくても、新聞は一応目を通している筈だけど、そんな記事は無かったはず・・・だけだな・・・？

「出来れば、そっちがよかったかもな・・・」

川村は、居心地悪そうに助手席のシートへ深くもたれ、めったに見せない投げやりなため息をついた。

「もしかして・・・癌で・・・」

「うちへ来た！？」

麗子は運転席でハンドルをきつく握り、心の準備をする。

が・・・返事はない。

彼は少し頭を下げて、領いたのかもしれない。

だが、運転中の私は確かめようがない。

「教えて！！」

「・・・！！」

「もし彼が逼迫した状況にあるというのなら・・・」

「私、力になってあげられるかもしれないでしょ！」

自分でも驚くような早口で催促すると、

「話す前に、一応訊いておきたいんだ。」

「君は、なぜあの場所で行くわしたか、理由は考えてみたか？」

「あの場所？」

続く川村の問いかけが、私の脳を醒ませた。
車を路肩へ寄せ、サイドブレーキを強く引く。

ロマンティックな偶然の再会？ 勿論、違っでしょ。

「ハルはホスピスに……知り合いを見舞った！」
わざと、見当違いを言った。

私は、どうして……

“あの場所” で、出会ったかなんて考える余裕すらなかった。
いや考えたくなかった。

とても驚いて……、そして嬉しくて、哀しくて、
そして恐さがピークを迎え怯えていた。
私の瞳から涙が自然に零れ落ちていく。

あの瞬間からこの1秒前迄、彼がそこにいるという事実に、
押しつぶされていた。

「もう……気づいてるんだろ？」

「きみ……も！」

川村が、残酷な言葉を放った。

「麗子、真実を見つめろよ！」

と、私の正気を揺り起こす。

私は考えが……言葉が見つからない。

「僕は彼と、中ですれ違ったよ。」

「彼は館内施設の説明を受けていた。」

「僕は一緒だったスタッフから、打ち合わせ中に医局で見た資料が・
・・」

「彼のものと耳打ちされた。」

「あいにく、下の名は忘れたが、名字は武藤で間違いない！」

「この先を聞きたいか？」

川村は私に選択権を委ねた。

「……………」

私は相変わらず言葉が出なかった。

「君は、ホスピスの外部スタッフでもある。」

「だから……当然患者の情報を知る事が出来るよね！」

「勿論友人として、麗子が直接彼に訊ねるという方法も、あるけどね！」

一気に川村は話を続けた。

私は、反射的に首を左右に振っていた。

「今、聞いておくわ！」

「私が何も調べずにいるとは、彼だって思っていないわ！」

「そうでしょ！」

「だから、さつさと帰ったのよ！」

「そうだね！」

「……………きつと！」

川村の声は医者言葉だった。

その言葉に、濁りはなかった。

センテンスを切り、ゆっくりと事実が告げられる。

「麗子、彼は……グリオーマだ、それもアストロサイトーマ！」

「グリオーマ……！」

ガーンと私の体が鳴った！

震えた！

私の視床下部も揺れた。

運転席でもがき、両手をハンドルに打ちつけた。

ああ、そう言う事、彼がやって来たのは。

でも……少し嬉しいのかな……

ハルが私を・・・

私を頼って・・・救いお求めて・・・

傷ついた・・・いいや！

死にかけた雄ライオンが・・・

ああ私も医者の端くれよね！

川村と私はホスピスに逆戻りし、武藤晴樹のカルテ、紹介状、レントゲンフィルムの写しをを詳しく見つめた。

しかし、どうあがいて見ても、診断が変わる事はありません。

何度所見を読み返そうと、白いシャーカステンに挟んだ、フィルムへ目を凝らそうとも、突きつけられた事実は変わらない。
グリオーマは、原発性脳腫瘍でほぼ3分の1を占める。

脳と脊髄には、神経細胞と神経線維以外に、その間を埋めている神経膠細胞があり、

この神経膠細胞から発生する腫瘍の総称が神経膠腫だ。グリオーマ

神経膠腫の頻度は、脳に原発する腫瘍の中で25・2%（4人に1人）である。

神経膠細胞には星状膠細胞、稀突起膠細胞、上衣細胞、などがあり、これらから発生する腫瘍はそれぞれ、星状細胞腫、稀突起神経膠腫、上衣腫、などと呼ばれる。

神経膠腫の多くは脳内・脊髄内に拡がって発育する（浸潤）のが特徴で、

これが治療を困難にしている理由だ。

すなわち、同じ場所に正常脳組織と腫瘍細胞が混在しているので、手術で全部摘出する事が困難と言いか不可能である。

グリオーマは病理組織学的な所見に基づいた病名で、さらにいくつかに細分されるが、

WHOでは臨床的悪性度も併せてグレードで評価する。

グレード1が最も良形で、

グレード4が最も悪性だ。

ハルは何とそのグレード4、悪性度では最悪に分類される膠芽腫を発症していた。

浸潤、という特徴を、星細胞腫は持つ。

周囲の正常な細胞と、悪性の腫瘍との境目が、惨んだように判然とせず、

一般に、悪性神経膠腫とは、グレード3と4の腫瘍を言う。

C a p - 8 F i n

では、後ほど 浅見 希

女医の彼 Cap - 9

女医の彼 Cap - 9

良性の神経膠腫が経過中に悪性に転化することはよくみられる。ちなみに生存期間中央値（50%の人が生存している期間で、平均生存期間に近い）は、グレード1で8〜10年、グレード2で7〜8年、グレード3で約2年、グレード4で1年未満とされている。

神経膠腫の治療が難しいのは、前記した浸潤性の性格のためと、脳の血管が抗癌剤などの物質を通過させない。

それはつまり、点滴しても脳脳腫瘍まで薬剤が届き難い事が、大きな理由となる。

延々と続く彼の言葉が、麗子の脳内で大きくイメージされる。残酷な映像・・・それも直ぐ近くに！

そう、ハルの病状は悪性度では最悪に分類される膠芽腫を発症していた。

浸潤、という特徴を、アストロサイトマ星細胞腫は持つ。

周囲の正常な細胞と、悪性の腫瘍との境目が、惨んだように判然とせず、

造影剤を使ったCTにも白くばやけた境界として写る。

もし、わるい部分をすべて取り去ろうとすれば、浸潤より外側の、健康な細胞にメスを入れなければならない。

首から下の癌細胞についてなら、その方法で除去する事にためらいは、
無かっただろう。

しかし脳は、場所ごとに担う役割が細かく決まっていて、傷つけた部位によっては、言葉が理解できなくなったり人格が崩壊したりと、著しい後遺症を生じる。

そして彼は、両手を使う職業、ピアニストだ。
繊細な視神経・聴覚が必須な職業だ。

何と、惨い仕打ちを彼に……。彼が受けた。
いいや、それが継続して、徐々に増大して……。終焉！

治療は、外科手術が可能と判断されれば、脳の機能を損なわない範囲で
腫瘍を摘出し、残った部分は放射線で叩くという手段を一般的にとる。

放射線治療と組み合わせ、ニドランなど抗癌剤を使用する場合もある。

ハルの最初の治療は、脳腫瘍の診断が下った半年前、ガンマナイフと言う、
比較的新しい放射線治療機器を用い行われた。

腫瘍は、小さなものが四つ、寄り集まったように左脳の運動野にあり、

放射線によって一旦は消失したかに見えた。

しかしハルは、維持療法として重要な放射線の全脳照射や、化学療法を拒んだ。

彼はその後、外来での経過観察にすらまともに応じていない。
当時彼が住んでいたポーランドの病院の担当医は、何度も電話するが応答なし、
と書類に記している。

「発見が比較的早かったのは、彼がピアノを弾くからだろっな！」
「神経内科を受診した時の 主訴は、右手指の不完全麻痺だ！」
「・・・・・・・・」

麗子は無言だ。

麗子を見ずに下を向いたまま、川村が無常な言葉を吐いた。

「切るべきじゃなかったのか？」

「命には代えられないだろう！」

彼の言葉は正論だ。

わかつている私にも、でも・・・

非常に近い存在、その人が病に冒されて、
死を見つめる現状を目にしたのは、

これが2度目・・・！

初めは、妹の法子これは全く為すすべが無かった。

しかし今、私の・・・乳房も、右大腿の黒子も、性感帯も知り尽くし、

女をひしと感じ、悶え、恍惚を知り、お互いを求め合う関係・・・

ほんの少し生きる嬉しさを、知り・・・

涙も、体液も共有して・・・唯一私の子宮に進入した男が・・・

指の動きと命を天秤にかけ、指を選び取ったピアニストは、
先月右下肢の痺れを訴え、同じ病院を訪れている。

再発だった。

膠芽腫は、まず、左脳運動野の手首の動きを司る部位と、すぐ隣の
手指、

そして足と足の指に関係する位置に、新たに発症している。

MRIで発見出来た腫瘍は合計9箇所。

残りは極めて小さく、顔の感覚神経を司る部位に見られた。

左脳は、体の右側の運動を支配する。
ハルの右手と、右の足は 腫瘍のせいでうまく動かせないはずだ。
左利きだと嘘をついた、薄い唇を改めて想う。

「グレード4の生存率はたった1割」

「だが、もし半年前に十分な治療をしていれば、その中に入れた可能性が大きい。」

私は単純に

「そうね！」と相槌を打っただけだ。

ピアノリストを断念しても、作曲や指導者として生きる、
という選択肢もあった。

思いどおりに生きていける人間などそんなにいるもんじゃない。

だからせめて、挫折ではなく、方向転換して、

肉体の変化を受け入れて欲しかった。

「意志が強くて、潔癖な人なの。」

「だから人知れず努力して、その分、プライドも高い」

「詳しいね！」

「・・・・・・！」

顔を上げると、川村の真剣な眼差しがこちらへ注がれていた。
ハルと親しく過ごした日々のことを、正直に打ち明けるべきだろうか。

だが川村はすぐに、手元のカルテへ視線を転じてしまった。

「麗子、プライドの問題で治療を打ち切るのか？」

「・・・・・・！？」

「時間を稼ぐ方法ならまだ少し残っている！」

「これからでも遅くないのでは・・・・・・」

「・・・・・・！」

「君らしくない・・・な！」

麗子は首を横に振るだけで、何も言おうとはしない。

そんな慰めに近い言葉は無意味に聞こえるだけだ。

そう、悲しいけれど、再発があった以上、手遅れには違いない。

ああ、もう何も考えたくない。

どうして・・・彼が！

彼に！

「再発後は・・・ほら見る向こうのカルテ！」

「投薬のみで化学療法も試みてない！」

その内容は、英語で記録されていた。

勿論私も目を通し、悔しいくらいに理解出来ていた。

「現代の医学水準では、完治はあり得ない。」

「残されているのは、どこまで延命するのかという問題だけだ。」

「そうね！」

麗子はかろうじて頷いた。

そしてそれは、本人がどのような生活を望むかで決まってくる。

「ステロイドが有効なのは、長くても3ヶ月。」

「知ってるはずだよな！」

「ええ、勿論！」

「ステロイドの維持療法でね！」

「そして、これは治療薬ではない。」

「あくまでも症状の改善でしかない！」

「インターフェロンや、ニトロソウレア系抗癌剤を使ったのかしら？」

「さあ・・・どうだろうか！」

「他の病院にいった可能性も・・・でも抗癌剤は副作用が強くて・・・」

「それに、外来だけでは・・・」

「ああ、それは言えてるな！」

「もしかすると・・・自主退院を！」

C a p - 9 F i n

では、後ほど 浅見 希

女医の彼 Cap-10

女医の彼 Cap-10

ステロイド剤やグリセオールなどの脳圧降下剤の点滴、静注により、症状は改善するが、それはごまかしでしかない。

放射線外照射に加え、ニトロソウレア系抗癌剤、インターフェロンなどの

化学療法・免疫療法が完全ではないのが現状だわ。

腫瘍の周囲に起こった脳の腫れを、ステロイドが鎮めてくれる。だが、ハルがこの薬を投与されてから、既にひと月以上が経過している。

せいぜい残された彼の寿命は2ヶ月もないだろう。

「聞いているのか・・・麗子！」

「あっ・・・は・・・はい！」

「今の彼の体は、もはやどんな事が起こってもおかしくない！」

「はい、覚悟してます！」

「知ってるつもりよ！ 私だって・・・」

医者だ！・・・という言葉呑み込んだ！

病魔に侵され腫れ続ける脳は、限られた容積の中で出口を探し、脳ヘルニアの状態となり、脳内出血を起こす。

「その先は・・・、あらゆる脳障害、意識不明、呼吸停止。」

「・・・・・・・・」

「まだ若い！！」

「だけど、彼は納得ずくで治療を拒んだのよ！」

「やるだけのことをやれば、確実に生存期間は延ばせるんだぞ！」

彼が、ハルにどんな治療を施したいのか十分わかっている。

「少しでも長く生きて欲しいと思わないのか？」

「それは・・・彼は望まないわ！」

「・・・きつと！」

「でも・・・一度は言ってみるべきだ！」

「残される人間のために努力する気はないのか？ と！..」

“だれに・・・だれのために・・・！？”

川村の言い分に間違いは見当たらない！

でも、私と彼の間にはそう簡単に割り切れない問題が・・・

「やってからあきらめても遅くない」

「わかってる、・・・つもりよ、十分に！」

「なら・・・」

「いい！！」

「貴方に言うのも、おかしいけれど、遭えて言わせて貰うわ！」

「ここはホスピスです！！」

「そして彼は、病院よりこちらを選んだ！」

「彼の意思で！」

「ほかの患者さんの意思は尊重して・・・」

「自分の知り合いなら介入するというのは、おかしいと思うの！」

「・・・」

「ふう・・・」

今度は、川村が言葉に詰まった！

往診の予定時刻が迫っていた。

私達は、それからろくに言葉も交わさず病院へ戻った。

終わってしまったミーティングの報告を受ける川村を横目に、私は急いで薬品を車へ積み込み、今日最初の訪問先へと向かった。

再発してからのハルは、今の症状の対処療法として薬を服用する以外、

一切の根治的治療を行っていないかった。

場所が脳にある腫傷の為に、外科手術を施すには難しく、大きさと部位から、

前回使用したガンマナイフも断念せざるを得なかった。

腫傷を叩く最後の手段は、放射線の全脳照射と抗癌剤などの、化学療法を組み合わせる方法で、その副作用は、計り知れない苦痛、苦悩を彼に強いる事は必至だろう。

末期癌の患者の団地内にある施設の駐車場に車を停め、私ならどうするか、と考える。

自分が耐えられないことを、人に無理強いしてよいものだろうか。いや、きっと川村なら耐えるのだろう。

私は、かなり草臥れたドクター鞆の取っ手をつかむと、重い気持ちで車外へ出た。空は晴れているのに・・・

ベテラン看護師の吉沢里美看護師も、同行している。

彼女には7日分の点滴器材、薬品を持ってもらった。

もしかすると、それはもうそんなには必要無くなる可能性も・・・

妹の死体を介抱していたあの日、

それから幾日も経たずに私は、彼に手を引かれ、

夕暮れの児童福祉施設にたどり着いた。

ほかでもない私自身が、父親に捨てられた。

その後、市の福祉課からの斡旋で、彼の働く施設に・・・
そして、私の全てを救ってくれた、神の様な恩人だ。

「脈拍、血圧、体温とも特に変わりないですね！」

「はい！ ご苦労様です」

「横になるより、座っている方が楽なの？」

「まあ・・・な！」

「どんな姿勢も今の私には・・・同じさ！」

彼が私の引き取り手を世話してくれた人。

彼の力で私は、佐藤の知人の医師夫婦に養女として、
引き取られていった。

あの時以来私はあいつの消息を知らない。
決して、知ろうとは思わない。

「そう・・・」

「背中と、胃が、むかつくよ！」

「重苦しくさも・・・な！」

「痛む？」

「いやいや、キリキリ痛んだりはない。」

「まあそれよりも・・・」

「どうにも身の置きどころに困る、つてな感じだな！」

看護師の吉沢は採血と尿検査、等の作業を淡々と行った。
無言である。

この患者にはあえて余計な事は言わないように心している。

そうする事が、患者そして麗子への思いやりだと思っている。

何度も集団検診も無視して来た。

その結果として、肺癌の早期発見を逃した。

佐藤は肺癌、それも手術不能の腺癌と診断され、6ヶ月程経つ。その経緯は、麗子が何とか説得して検査を行った。それが、今の現状だ。

そして、あらゆる事があつた。

2ヶ月前には脳への転移も見つかり、いやいやながら、放射線の全脳照射と、化学療法を開始したが、効果よりも衰弱が早く、治療をあきらめ、家へ戻る決断を下した。

C a p - 1 0 F i n

では、後ほど 浅見 希

女医の彼 Cap - 11

女医の彼 Cap - 11

「なあ・・・、麗子ちゃん！」

「あんな事されるくらいならもう良いよ！」

「それって・・・」

「ああ、もう終わりにしたいよ！」

「でも・・・」

麗子には2つの心が揺れている。・・・今も！

麗子は、医者としての義務、モラル、正義を背に必死に説得する・

・

自分がいて、もう1つの麗子の心は言葉に出来ない複雑な何かだった。

56

何故なら、昔から麗子自身これまで死をずっと考えて来た。

そのために・・・医学部を選んだはずだった・・・のだから！

過去からずっと今も、何度も死ぬ事を考えていた。

いや・・・いる！そんな麗子が。

だが、白衣を着てると、病院で勤務していると、

真剣に病人怪我人を助けるのに必死だ。

白衣を脱いでいる時も、近くで倒れた人がいると、異常に気になる。

やはり、医師の本能が・・・

育てられた義務が、正義が、倫理感が自然に反応してしまう。

そんな時に私は、逃げる。車に・・・

心を静めるために愛車を駆って、高速道路の制限速度を、無視する様なスピードで、走り抜ける。
都内のオービスの位置は把握している。

そして、本当にフルスロットルに近い状況を提供する場所を見つけた。

それは、違反であることは十二分に承知している。
でも、それは決して他人に迷惑をかけない場所だ。
勿論、遺書もしっかりバッグに入れてある。
だが、それは死に行くのではない。
万一の事を考えての準備だ！

そんな投げやりの佐藤を説得して、自宅での療養を勧めた。
麗子の熱意が届いたのだろう。

そして、麗子の本心も彼が気づいている事も・・・
それは、二人の秘密として、墓場まで持って行く事を、
硬く約束して契約済みだ。

ハルの命をいくらかでも延ばす治療法というのは、それだ。

佐藤老人は、今も言い続けている。

「あれは俺の体質に合わねえ！」

「吐いたり、むかむかしたりってのはさあ・・・」

「麗子ちゃんよう・・・健康にわるい証拠だろうよ。」

「・・・・・・・・ええ、まあ・・・」

麗子は曖昧に返事をする。

「俺は、奴らに、殺されかけた！」

笑いが、やせこけて離くちゃんの顔を明るくする。

病院で殺されかけた、は彼のお気に入りの“フレーズ”だ。

「おじさん、あの若い生意気ですました主治医を一喝してやったのよね！」

「そう・・・“おまえは患者を毒殺するつもりか！”と怒鳴ってやったよ！」

「そうしたら若造め、しつぱ巻いて逃げ出しやがった！」

「あの病院で、一躍有名よ、おじさん！」

「わかる、ねえ、おばさん！」

相変わらず、看護師は、無言で自分の成すべき事をこなす。

彼女は、瞳を輝かせ、熱っぽく性急に言った。

「麗子ちゃん、痛みがなくなったのは、前よりちよつとは良くなつて、

るからじゃないかしら!？」

その瞳が・・・潤んでいる、瞼も腫れて。

私は、淡々と、医者として答える以外の術を失った。

「前回診察した時より、今日の方が顔色良いみたいですね！」

「やっぱりそう思う?」

ええ、と頷き、彼女のささやかな満足が消えないうちに、話題をすりかえる。

必死で平静を装い続けた。

麗子にとって、これ以上の間は恐怖になるだけだ。

泣き出してしまいそう。

イヤ・・・もう心の中はグシャグシャで、ドシヤ降りだわ。

「それって、環境がいいのかな?」

“良くなってる”わけなど無いと、彼女もわかっている筈だ。
ベテランの医師たちのモットーは、

“嘘をつかず謙虚な姿勢で奇跡を否定せず、少しの希望でさえもしっかりと援護しろ！”だ。

「担当医をどやしつけるような頑固親父がね……！」

「お婆さんの言う事なら、何でも大人しく従うんだものねえ！」

言葉が……喋りがやや早い。

「聞きましたか、お父さん」

満足げに麗子の言葉を擁護するように、そして介護をする側にも、心に火が灯るのがわかる景色だ。

在宅患者の家族は、果たして十分なケアが行えているものかと、常に気にしている。

家庭での療養が病院より劣ると、本気で信じている人が多い。でもそんな事は決して無いと声を大にして言いたい！

医療は時に……心の、精神のケアを重視すべき時も、決して少なくはない！

いいえ、この様な治らない……

治せない患者にはそれが、一番の治療なのかも……

そんな事を考えていると、

今まで沈黙していた看護師の吉沢が言葉を発した。

「この様な介護、私は素晴らしいと、自身を持って言えますよ！」

相当経験を積んだ熟練の看護師の言葉は非常に現実感があり、重い。

「そうですね！」

介護人の夫人はともその言葉に救われた様だ。

勿論患者である、佐藤もだ！

「所でおじさん、背中と胃の重苦しい感じで、眠れないの？」

「……まあ……な！」

「もっとよく効く薬があるけれど、置いていきましようか？」

尋ねているが、麗子は既に薬の処方決めて、それしか持って来ていない。

弱々しげに、頭髮の抜け落ちた頭が、くるりとこちらを振り返る。さっきまで元気そうに話していても、急に呆けたように窓の外を眺めてみたり、

呼びかけに反応しなくなったりする。

どうやら・・・聴力の低下？ それとも思考回路が・・・

C a p - 1 1 F i n

では、後ほど 浅見 希

女医の彼 Cap - 12

女医の彼 Cap - 12

「なんだって？」

思考回路の切れかかった脳が遅れて反応した。周りが少しの驚きを見てお互いを見つめあう。

放射線的全脳照射には、毛髪を落とし、後には痴呆症状を引き起こす副作用がある事は、確認済みである。

ただし彼の今の症状は、病気の急激な進行によるものだろう！もう一度同じ言葉を繰り返す。

「背中が苦しくて、横になれないと言ってたわよね？」
「どうやら今度は通じた様だ。」

「ああ、身の置き場がなくなてな。」

「転げまわるほどの痛みは消えたがね！」

現在の彼の鎮痛を緩和するのは、もう麻薬しか効果が期待出来ない。転移箇所には神経ブロックも行っている。

そして今現在、硫酸モルヒネ徐放錠であるMSコンチンを使用して

いる。
「少し、辛いね！ 何とかならないかね。眠れる事が出来るとね・
・・！」

「なりますよ。大丈夫！」

「30mgの薬を、60mgに増量するから・・・」

「そうか・・・助かるよ！」

「それより、いつそもっと強いのが欲しいな！」

「えっ・・それって・・・」

「ああ、それだよ！　なあ！」

「ちよつと……それは約束が……違うでしょ！」

場が少し凍った。

淡々と麗子は続けた。

「あのね、少し大きくなるけれど大丈夫よね！」

「効き目が倍になるの！」

それから麗子は介護人である妻の方へ向き直り、

「これで、様子を見てみましょう。」

「もし吐き気や、胸が苦しくなったり、何か変わった事があったら・

・・」

「何時でも電話してね！」

看護師は、薬品の解説と使用上の注意、副作用などについて記した紙と共に、
薬を手渡した。

「じゃあ……ね、おじさん。」

「私、これからまだ4つもお呼びがあるから！」

「そうか……、麗子は売れっ子だな」

佐藤は笑い、ふたたび意識が清明になったのか、

働き盛りの頃を思わせるきりりとした表情を浮かべると、

「あつ、忘れるところだったよ！」

こちらへ来なさい、と私を手招いた。

私はベッドへ近寄る。

「また郵便だ！」

どうする？

佐藤は目で問いかける。

「おじさん、それ・・・いらないわ!」

彼の手にある、その封筒の姿かたちだけで、あの男からの便りだとわかる。

彼は、私を捨てた父親だ。

何故かどうやって調べたのか、佐藤に近況を郵便でよこす様になった。

結びに必ず、未練たらしく

「麗子にも読ませてください」と記されているらしい。

ふざけないでよ!

どれだけ身勝手なのよ!

あの時の非常な父親に、二度と合う気は無い。

私は一度として、中身を目にしていない。

どうやら、一度は海外で成功したらしいが、結局バブルのあおりで事業に失敗、

体もボロボロになったらしい。

そして、何処かで惨めに一人で療養しているらしい。

あいつも人生の終わりが近いと、叔父さんから聞かされた事があった。

「会いたがっている」

私は首を大袈裟に横に振る。

「身体を壊しているらしい」

「それは、ずるいわ!」

あいつだけは、絶対に許せないと心に誓っている。

今も・・・ずっとこれから・・・

「人の気持ちは変わるものだが・・・」

「お父さんは、もうあの頃のお父さんではなくなっている。」

「そうは思えないかな?」

だから私にどうしろと？

「老いれば、誰しも弱気になる。」

「身体が弱るとね、どんなに強かった人間もな・・・」

「やっとな・・・弱い立場を思いやれるようになるからね！」

「・・・！！」

それでは遅すぎるわ。

自分が弱者に転じたものだから心を入れ替え、それを理由に、過去の悪しき行いを免罪しろと？

「私、あいつに捨てられた事は、絶対に許せない！」

「そうか・・・そうだよな！」

「私の母親は、私を産んだ母と、少しだけ育ててくれた母と・・・」

「

「ふたりもいたけれど・・・」

「その存在もまるでわからないわ！」

「良いの、もう全部！」

「そして、私の父親は、森山の父ひとりだけなの！」

「ごめんなさい。」

「こんな親不孝な私を許して！」

「スマン、悪いのは私の方だ！」

便りをよこした男ではなく、ずっと心を痛めてくれている佐藤に、

言葉にならない謝罪をした。

残念だが、もう佐藤は長くない。

私とあの男との間に挟まれたまま、想いを残し、逝くことになる。
「引き留めてすまなかったね。」

「さあ、もう行きなさい！」

佐藤は、介護用ベッドに薄くなつた上体を起こし、背に当てた大きなクッションへ埋め込まれたような体勢で、こちらを見ている。

何故か目が異常に大きく見える。痩せたからだろう。

「痛くなくても、会いたくなったら電話してね」

「それじゃ・・・、家内と暇つぶしのネタが尽きたら、電話するよ！」

「その時は、麗子ちゃんをやり込めて冥土の友達に自慢するか！」

「ええどうぞ！ 歓迎するわ！」

「でもね！おじさん、覚悟してよ！」

「オウ・・・何だか怖いな！」

「私には、あらゆる武器があるのを忘れないで！」

「麗子先生・・・それ脅しですよ！」

と、看護師の吉沢がたしなめた。

でも、笑いながら、麗子は続ける。

「最高のお味の薬とか、特大の注射をいつも携帯しているからね！」

「おい、それは反則だろ・・・麗子先生！」

「おじさん、冗談よ！」

「だからちゃんと食事、叔母さんに食べさせて貰ってね！」

C a p - 1 2 F i n

では、後ほど 浅見 希

女医の彼 Cap - 13

女医の彼 Cap - 13

余命1ヶ月もないだろう佐藤は愉しげに笑いながら、もう良いから早く行けという風に不自由な手を振り、そのまま床に横たわった。

生物は、生命としての営みを開始した瞬間から、ゆつくりと、死に向かって歩みを続ける。

それが、生物だ。宿命だ全て生を得た物の……

輪廻転生が、あるのかは解からないが、

生物は生まれたら、順番に死へと、向かう義務（責任）があると思う。

それが無いと地球規模で人類のバランスが崩れる。

己の力、意思でそれを選ぶ者、不可抗力で選ばれてしまう者、麗子は、ある時からその前者2つの選択を考えた事がある。

だが、今の職業で、少なからず気持ちの変化が現れている事を、脳内で認識している事も、肌で感じているようだ。

生きたくても、強制的に死を選ばされてしまう人を多く見ていて、いつそ、その人と交換したいと真剣に考えた事もある。

事実、今ハルと私の天命を交換してあげたいと、真剣に考えた。

ハルとの再会が、偶然などではない事は、よくわかっている。勤務医一人や二人の、消息をたどるのにそう苦労はないはず。

入所するのにあたり、ホスピス側に提出された資料を見れば、

紹介者である日本の大学病院の主治医は初診時に、ポーランドの病院で作成された詳細な書類をハルから受け取っている。

専門医の所見と、様々な検査結果、処方履歴、治療の経過、効果を、

そしてガンマナイフでの治療の経緯等が、英語で日本人医師向けに書き直された紹介状と経過の推移の数々、数枚のCT写真のコピーと共に、添えられたファイルを持参していた。

最初の脳腫瘍の診断と、治療を受けたのは日本ではなかった。そして再発が起こるまで、ハルはポーランドのワルシャワに暮らしていた。

職業はピアニスト、特記事項として、

「人工呼吸器や心臓マッサージ、栄養点滴等一切の延命治療は希望せず。」

「緊急時の連絡先は、親族ではなく彼の顧問弁護士へ！」と、なっている。

それが、何を意味するか、一目瞭然だ。

帰国に際し、彼は、ワルシャワ旧市街の一軒家売り払っていた。現住所として彼は、都内のマンションの一室を記載している。

ピアノは、どこへやったのだろう。

何処かに寄付したとか、それとも……

病名を宣告され、死を悟り向こうで売り払ってしまったのだろうか？

後から後から、ハルの事が止めどなく湧き上がる。

その様々な疑問は、自分の職場のひとつでもあるホスピスへ出向く

だけで、

解決される筈なのだが・・・

そう・・・ハルに訊けばいいだけなのに！

勝手に、私を捨てて去って行ったその間、ハルがどのような暮らしをしていたのか。

どんな暮らしをしていたのか？

そう・・・何を見て、何処へ行き、誰と出会い、どんな人を愛し、今・・・この日本に戻り、何を想いどうしたいのか、とても気になる

それが、当たり前前の思考回路だろう。

帰国したのは、日本が恋しく、どうせ死ぬなら、生まれた地で・・・なのか？

それとも・・・私が・・・！！？

ホスピスのホールには、入所者が寄贈したピアノがある。

持ち主は他界したが、生前に愛用したピアノを、寄贈する事を決めていた。

その故人はどんな病気で死んだのか麗子は知らない。

何故か、知らなくて良かったと思っている。

そのピアノはずっと、ここへ訪れてはやがて必ず去っていく人々の死を見つめている、証人の一つだ。

ある時は、幼稚園の先生をしていた乳癌から肺癌を併発した女性
が、

シューベルトの曲を施設の人に聞かせる目的か、自分が弾きたかったのかは、

不明だったが、死ぬ少し前まで弾いていた様だ。

その女性は、周りの人間では、知る人は施設の関係者意外は、誰も知る人は居ない。

彼女は何と、ピアノの鍵盤に両手を乗せ、譜面台に顔をうつ伏せたままで、

死を迎えたという事だ。

またある時は、下半身が不自由で車椅子の男性がジャズを弾いていた事もあると言う。

勿論その男性もこの世に居ない。

そして、ボランティアの人が集まり演奏会を催してくれる時に、そのピアノが軽やかなメロデーを奏でる。

調律も、調律師の学生が、無償で具合をみてくれる。

ハルは、本当に最小限の荷物を持参して、タクシーでホスピスにやって来た。

あの車はどうしたのだろう。

彼にはもうすぐ必要なくなる車だ。

でもあれはレンタカーではないはずだし、何処からか盗んで来た物でもないだろう。

麗子は、ハルがホスピスに入所した事は後から、知人を通して知ることになる。

未だに彼の携帯番号もメールも知らない私。

ハルは、あそこにピアノがある事を不快に思うだろうか・・・
ピアノを見たり、ピアノの音が聴こえたら、ハルはどんな思いをするだろうかしら？

暴れるのだろうか、それとも直にここを飛び出すのだろうか？

私は彼の弾くショパンに心を何度も奪われた。

学校の音楽の時間に、半ば強制的に聞かされたあの曲がこんなにも、私の心を奪うのか、それは彼の演奏だから・・・それとも

音楽と言う物が私の荒んだ心を、世界を変えた。

ハルに出会うまで私は、こんな素晴らしい世界を知らなかった。

生き続けてもいいかな？　なんて少し思ったのは彼のおかげ・・・

それが・・・何と、彼に病魔が・・・どうして・・・

私でよかったのに・・・皮肉な運命を・・・

神はどうして・・・ずっと願っていた私の死への願望を嫌い、

ハルにそれを・・・彼は生きようと頑張っていた。

なんて、残酷なのだろうかしら・・・

C a p - 1 3 F i n

では、後ほど 浅見 希

女医の彼 Cap - 14

女医の彼 Cap - 14

ハルは幼い時分からショパンを聴き、ショパンを弾き、その彼のショパンで私は救われたのに……

彼は今……そのショパンが弾けない。

これからもずっと弾けなくなる、永久に……

勿論彼は、ショパンのためにワルシャワに住んだ。

彼がしきりに憧れ、師を請いたいと願っていたアルカディ ヴォロドスという演奏家は、

確かワルシャワで教えていたと言っていた筈だわ。

今、私の耳に聞えて来るピアノの楽曲それは勿論、彼のショパンではなかった。

私の好きな曲でもない。

何万何千と言う音楽家がショパンを弾くけれど、それは違うの……。

やはり私は、彼の弾くショパンが好きなの……

私は、彼の演奏スタイルが好き、言葉に出来ないけれど何故か彼の奏でるピアノが、

ショパンの葬送を聞くと心が和んでしまう。

どうして？

わけなど無い……何故かハルが冗談で私に弾いてくれた。

私が事あるごとに、死を望んでいたから、軽い洒落で……

あの時、この曲名は教えてくれなかった。

でも何となく想像出来た。

そして、彼から曲名は教えてもらった事など勿論無い。

私が、ハルに曲の演奏をせがむと、何処かにさりげなく挟み込んでくれる。

ハルは、“シヨパンの心”を、本当の“作曲家の意図”を肌で感じる目的で、

心から尊敬できる素晴らしい教師に素直に従い、熱心に学んだ。

そして、演奏スタイルでは無い、本当の心で弾く、彼のシヨパンを完成させた。

彼の周りの友人は、入賞を狙えると言う、前評判だった。

だが、当日彼は演奏会に参加しなかった。

その原因は今もハルからも、友人からも一度も聞いた事がない。

ハルは、そのまま消息を絶ち大学院から姿を消した。

と言うより退学処分となった。

それから数年後、ヨーロッパの音楽専門誌でハルの記事が載っている事を、

知人から聞かされた。

ハルは有名になった。

彼の演奏は日本を飛び越えて、ヨーロッパで受け入れられた。

まあ、早く言えば日本の指導者よりも海外の指導者に、

受け入れられ、それが正しく評価された。

何故あの時、日本のあのコンサートをすっぱかしたのかは未だに謎だ。

それが影響してか、日本での凱旋コンサートの話は無かった。

そんな彼は、魔病をたずさえ、前触れもなしに舞い戻った。

日本へ・・・それは土地が恋しいのか・・・

それとも・・・ワタシ・・・！？

彼は、きつと、恋した誰かの前から説明もなく姿を消して・・・日本へ舞い戻ったのだらう。

麗子にとって、連絡先が弁護士なのは、ちょっと寂しい・・・はず！

6年前に、私は彼の部屋の前で、何時間も待ち続けた。

明かりはついていたのだが、ノックをする事もなく、立ちすくんでいた。

決して彼が気づいてくれる事は期待していなかった。

そして、そのままその部屋を後にした。

その時私は “ 違う ” と思った。

あの部屋には別の女性がいたはずは無いと確信していたのに・・・

彼に、虜になり心底惚れた女性が、寒い春の朝にワルシャワの、灰色の空を仰ぎ見て、

行方の知れない、傷つき鰯の目のようにくすんだ、日本人の恋人を想い、

悲しみ泣き崩れているのだろうか・・・

私は味わっている！何度も。

ハルは、そうやって自分に愛を傾ける従順な人間を平気で裏切るのを・・・

それは、相手をおとしめるためでなく、自分の価値を素直に認識していない。

そんな、追われる心を、自ら疑って絶ってしまふ。

素直になれば良いものを……

彼は、多くの人から愛されていていい資質があると、けっして認めよう
としない。

そして、何度も多くの誤解を生じる。

それが、彼の生まれつきの最大の弱点なのだ。

彼は、決して器用な恋愛など出来ない。

好きな女性からの告白を信じず、素直に好きと言えないもどかしさ
が、

彼を時々暴力的な態度として現れる事がある。

そう、本当に不器用な人間なのだ。

そして、置き去りにされ悲しむ人間がいることも、

知ってか知らずか平気で無視する。

“俺と麗子の共通点は、それぞれの自己評価が極端に低いって事だ
な！”

何故かハルはそう得意げに、言ったものだった。

“全力を尽くしている時でさえ、自分を最低な人間としか思えな
い。”

“それだからこそ人一倍練習して、それなりにピアノが弾けるよう
になった。”

“麗子もな……頭はさ程良くないくせに、高望みして医学部なん
か目指してよ！”

でもそれでも、まだまだ足りないと思わぬ日もあるだろ？

初めて訪れる街の、人気のない深夜の駅へ降り立つように目を凝
らす。

知らぬ間に犯す過ちや、忘れもの、見落とし、失念、

それらがいつかこの身を滅ぼすと、頑なに信じている。

所在ない焦りが、私を突き動かす。

それは死への憧れより強い。

あれもこれも全て、これまで行っ たなにもかもが、不十分だったと
感じる。

失われている筈のものを何かと必死で探す。

それが何かは知らないくせに。

しかし終電前の駅のホームで、去り行く列車のテールランプを見
送るように、

終わりの静寂を見届ける覚悟が、きちんと整理されている事は感覚
として捕らえている。

もう結果が見えているのに、頑張っ ちまう馬鹿なやつがいる。

と、ハルは笑っていたわね。

“見切りをつけました”、と澄ましながら、俺も、麗子も、悪あが
きをやめられない。

それを人は“努力”と、言うんだよな！

そんな過去を回想する麗子、あれは若かった、そして純だった。と！

C a p - 1 4 F i n

では、後ほど 浅見 希

女医の彼 Cap - 15

女医の彼 Cap - 15

生きて来て、達成感なんかいくら探してもどこにもない類の人間の、

際限のない己の罪悪なんてまるで感じない人間。

私は、妹の死を目の当たりにした。

成長する過程で、いつも死を目標に生きて来た。

今は、病院の壁の白いボードを、当座は死ねない理由として仰ぎ見る。

そこには、大学での倫理観、そして私を待つ人の具体的な明日の予定が、

害き出されている。

待つ人の許へ、私は行く！ 行かねばならないから……

先にあるものを見つめ前へ動き続けなければ、私はおそらく、自分自身の重圧に耐えられなくなるだろう。

ああ……、何故なの、何故彼の脳が病魔に冒されたのだろう。

それも癌だ、脳以外ならもう少し私にも手立てがあるものを……

その上に何故、私の許へ舞い戻るなどという愚行を、犯すのだろうか？

私にとってハルは、手の届かないはるか彼方へ飛び立った存在なのに、

どうして……でも少し嬉しいのが本音かも！

彼は、欧州のどこかで音楽家として成功し、私の事等すっかり忘れていた筈だ

ったのに。

これは、夢だと思い込めたら、いつそ良かったのにと……、私の別な自分の醜い心が囁いた。

あれ以来、私は、ハルとは会わずに過ごし、忘れようとした。

ハルの真意を知る事は、私にどんな影響をもたらすのか、それを恐れていた。

もはや彼はあの瞬間から、穏やかに安定した私の日常に……、湖面に薄く張った氷に、細かなひび割れを生じさせてしまったわ……きつと！

連続して平穏な時間を細切れに分かち、日に幾度も忙しく働く私の意識の中に、ものの見事に進入しまくっている。

私は、脳梗塞後遺症の患者に採血を行いながら、ハルの腫傷の色を想う。

心不全で高血圧の患者の血圧を測りながら、ハルの脳圧を慮る。リハビリ中の患者がパソコンのキーボードが打てるようになったと、喜ぶ脳卒中を効果の進展具合を、こんなにも気になる自分がいる。それは……全てハルの手指の動きと重ね、今ハルはどんなだか気になる。

これって、真面目に仕事をしているのか、ふと自分を責める。

まるで川村は、一切介入しない。

あの話の後以後は、まさしく静観を決め込んでいる。

例えば、“面会に行ったかとか”治療は勧めたのか？“とかも訊かず、

まるで、それは私の過去を詮索するような事はしなかった。決して忘れていたのではない。

それは、彼なりの愛情なのか、あるいは思いやりからか、

あえて口を挟まずにいるのだろう。

あれから、1週間程が経過していた。

午前の診察を終えた私は、看護師からメモを渡された。

“第二応接室に来客”とのメモだった。

それは事務員の中村の筆跡だった。

「早川医長ですよ、ホスピスの！」

「あら、……どうして！」

“あら……どんな御用かしら……かしこまって！”

のはずだが普段なら……それに応接室でなんて！

麗子は直ぐにピンと来た。

きつと、ハルの事で何か問題を起こして院長が私に、直々に会いに来たのだろう。

私ははやる気持ちを抑えて、第二応接室に急いだ。

ノックをする手が少し震えている。

「はい！」

と、まるで待ち構えていたような返事だ。

やばそうだ、アレから私はハルに面会に一度も出向いていない。

「どうも、遅くなりました。」

「あつ、お忙しいのに恐縮です！」

物腰の穏やかで柔和な早川医長の表情が硬い。

これは完全に一大事だ。

“ハル何をしたの！？”

「単刀直入に申し上げます！」

何故か、麗子は自分の病名を宣告されるように神妙に、そして胸が高鳴った。

「武藤晴樹氏が今後も生活態度を改めないのであれば、……。」

「退所して頂かねばならない・・・、とスタッフが要求しています。」

武藤晴樹氏、とは、勿論あのハルだ。

「そうですか・・・。」

やはり・・・来たか！

何故、私はハルの見舞いに顔を出さないのか、自分では思考回路が、ショートしているのを自覚している。

「うちのスタッフは、プロ中のプロですから、並大抵では動揺しません。」

「今までも、精神的に追い詰められた方が、一過性の事とは言え、物を投げつけたり食事をひっくり返したり・・・。」

「時には暴力をもつて、心情を表現なさいますからね！」

「勿論、そんなことは承知してらっしゃるでしょう！」

「はい、存じております！」

今日の前にいる院長である医師に、言わせなくても良い言葉を・・・

ああ・・・遅かった。明日はと思いつつ後手にまわった。

忙しいのは私だけではない。

私の知る医師はみんな目の回る程忙しい。

ハルのカルテを見たあの最初の日、川村が早川に説明した。

入所者向けのオリエンテーションを受けていた男性は、

“偶然にも”私の学生時代の親しい友人であったと。

その他にも、ホスピスの院長である早川が知り得た事実は、きつともつとあるだろう。

“親しい友人”であるという以外に、ハルの言動仕草等から・・・

あるいは私の表情からもきつと、多くを感じ取っただろう。

私が逆の立場なら・・・医者 endpoint くれなら、きつと感じ取れる。

C a p - 1 5 F i n

では、後ほど 浅見 希

女医の彼 Cap - 16

女医の彼 Cap - 16

だから、川村の留守を狙って訪れたのかしら？

「彼は、検温も血圧測定も拒否しています。」

「看護師が出向くと、次は脈と体温と血圧をメモした紙が、部屋のドアに挟まれているという事です。」

「それも、毎回同じ数字が・・・」

「・・・・・・そうですか、それは御迷惑を！」
言ってしまった。

これは完全に彼との事を肯定している。

ハルは・・・彼は、積極的な治療を放棄して入所した。
だが脳圧降下薬と、鎮痛・不安・不快の緩和薬は、服用を続けている。

しかし、麻薬は処方を見合わせている。

モルヒネ類は彼にとつて余りにも危険すぎる。

それは、言わずと知れた事だ。

薬を処方する側としては、体調を観察する義務がある。

まだ院長の苦情は続く。

「アルコールと煙草をたしなまれるのは自由、という規則になって
はいます。」

「所が、彼は煙草を余りにも自由に喫煙しすぎです！」

「それに彼は外出も、自由すぎます！」

「確かに24時間お好きにしてもらう方針ですが、・・・・」

早川院長は続ける。

毎夜外出するハルが、深夜に複数の女性達を引き連れて帰ります。それも、一般人とはかけ離れた露出の多い服装で、応接室に連れ込みます。

そして、高価な酒をその女性以外にも、そうホスピス在住の患者にも振る舞い、

大声で騒ぎを繰り返します。

不眠に悩む患者からの不満が爆発寸前です。

他にも、飲酒を医師から止められている患者にも勧めます。

これは、由々しき現状です。

今までにも、死への恐怖から、特異な行動を起こす患者さんも多々ありました。

ある程度の事は目をつぶって来たつもりです。

しかしさすがに、私どもの限界を超えた振る舞いに、

私が貴方の元へ相談に参りました。

他にも、ハルに対する苦情は、多くの職員から出ていた事が、早川院長の顔つきから想像できる。

まあ当然の事だろう、私が逆の立場でもそうするに違いない。

それにしても・・・ハル！ 私が見舞いに一度も来ない事への当て付け？

それは、十二分に想像出来た。

なら・・・どうして行ってあげないのか。

彼の事ならこの日本の中では一番知っているはずなのに・・・

麗子は何かに躊躇していると言うか・・・

怯えている。その後の彼と私の成り行きに、結果は見えている筈だから・・・

それにしても、私の知っている過去の彼とは似て非なる人物像だ。

病魔がそこまで武藤晴樹を変えてしまったのか・・・
考えられる事は1つだ。

それは・・・私が彼を放置しているからだろう。

昔は私が願っても見舞い等と言う行為を許さなかったハルなのに！

院長はまだ足りないとはかりに続ける。

「外食も、出前を取るのも、皆さん同様に許可された事ですが、

彼は、入所してから一度も、所内の食事に手をつけようとしません。」

「なのに、わざわざ食堂に顔を出し、アルコールを勧めます。
それを止められている患者にです！」

他にもまだ言いたそうだったが、私の弱りきった顔を見て言葉を止めた。

だが、一番聞きたい事を今までの口調とは変えて、ゆっくりとした瞬きのあとで、

私の目をまつすぐに見て話はじめた。

「強制退院は、どこまでやればと、私どもを試しているように思えます。」

「これまでも、その様な方を私共は知っています。」

「でも・・・彼は、そのような人物では無いのでは？」

「はい、私の知っている武藤晴樹は別人です！」

「そうでしょうね！ 私が今申し上げたような人物は・・・きつと・・・」

「はい、私にも思い当たるふしが・・・」

「そうですか・・・それでは、これ以上は愚問かと・・・」

この医師が何を言いたいのか、そして何を私に欲しているのか、

医師である私とハルの関係が、どんな物であるかになどに興味は無いが、

収集を図って欲しいと言うのが、今日わざわざ訪れた趣旨だろう。

私は、後悔している。

何故もつと早くに彼の元に見舞いに行かなかったか！

院長は、長い経験から何が原因なのかはすでにお見通しだ。

勿論、私と彼のプライバシーに関してはこれっぽっちも頓着していない。

そんな下世話なことではなく、携わっている武藤晴樹が、

どのような援助の手を欲しているか、その答えを確認して、それを私に求めている。

「院長が疑問に感じてらっしゃる通り、武藤は本来の彼とはまったく違った、

行動をとっていると思います！」

もう院長の真剣で誠実な言動には、私の言葉で断言するしかない。

「私の知る限り、信じた主張は意地でも曲げない性格ですが、周囲に迷惑をかけるような人ではありません。」

「より繊細で、静かで平和な暮らしを好む、頭のいい人です！」

そしてもう一つ付け加えた。

「ああそれと、彼はアルコール苦手の筈ですが！」

早川院長は、しごく当然のように、微笑んで

「それは察していました！」

「武藤さんのお酒は、ほかの入所者を寄せつけないための小道具でしょう！」

「ある晩の見回りで、彼の部屋の流し台からアルコールの臭いがしました！」

「彼は、酒瓶の内容物を減らす必要があるので、隙を見つけて流し

ているのでしょうか！」

「そうですか……」

全とお見通しと言った所だ。

「ご友人に、何かお伝えすることはありませんか？」

ソファアの席を立ちながら、早川院長が訊いた。

「あのう……まだ実際に退所させるかどうか、」

「会議など持たれて決定したわけではないのでしょうか？」

「はい。入所してしばらくは、落ち着かなくて当たり前ですからね
！」

「もう暫く様子を見て、それから検討することになるでしょう！」

「それは、大変寛大な対応に感謝いたします。」

「でも院長は、彼が意図的に波風を立てていると思っていらっしゃる！」

早川は無言で、私の眼をじっと見て、腰を浮かせながら、

「では、これで失礼します。」

「それから、患者さんのプライバシーにかかわる相談とも言えます
からね」

「川村君には、今日のことは内緒にしましょう！」

C a p - 1 6 F i n

では、後ほど 浅見 希

女医の彼 Cap - 17

女医の彼 Cap - 17

私は、咄嗟に立って返事をした。

「明日、伺います！」

私は、早川の背中へ呼びかけていた。

早川は、背中越しに首を立てに振った。

「明日、私から話してみます！」

「まだ面会に行っていないので……」

だが私には、なにも、本当になにひとつ、やましいことなどない。
はず……

「助かります！」

早川院長は、少し戻って振り返り大きながっちりした掌で、
私に握手を求めた。

“入室は遠慮願います！”の掲示板が張り出されたドアの前で、
周囲に人影がないことをさっと確認して、そっとドアノブへ触れる。
ノックはしない！

ドアノブを回し、ずっと身軽く中に押し入る。

この部屋のドアは、軽く力をかければゆっくりとスライドして、
右方向へ開くよう作られている。

基本的に病室のドアは施錠しないし出来ない様になっている。

そして、押したり引いたりするドアにはしない設計になっている。

患者や入室者を搬送する場合に、ストレッチャー等の出入りを安
易にするためだ。

歓迎されない派手な衣装の女性ゲスト達と、夜から朝の食事の時間迄酒を呑み、

回りの住民に迷惑をかけているこの部屋の住人は、ベッドの中で何の反応も無い。

きつと、読まれている。そろそろ来る頃だと・・・

私は、何故か白衣姿である。

勿論私は仕事の途中に時間を作り、ここへやって来たのだが・・・それは周りへの言い訳・・・、

何故もつと堂々と中の住人へ意思表示をしない。

そして、この廊下のすれ違いかもしれない患者や入所者へ、堂々と入室意思を明瞭にしないのだ。

ホスピスに病室はない。

この彼の居住場所はそれぞれが好き好きに、日常を過ごす私室である。

例え病状が進行して、ベッドから起き上がれない状態になったとしても、

本人が望んだ通りの生活が可能だ。

勿論このスペースは一般常識にのっとり、社会生活をおくる上で、他の入所者に迷惑をかけない範囲での行動が原則となる。

だが、ハルは入所からひたすら、幾多の不評不満を職員、入所者から集めた。

おそらく計算づくめの行動だろう、決して血迷ったのではないと私には断言できる。

そんな原因を作ったのは私の半端な行動からだろう。

月並みなハプニングには、スタッフは慣れきっている。

おそらく、これは・・・と思わせる問題行動を実際に起こした。情緒不安定な行動、咄嗟の感情にまかせた行動やわがまま、多少の粗暴、暴力は寛容でも、女を連れ込めばそれは一大事だ。秩序の乱れが他の入所者に悪影響を及ぼす。

息を殺し寝たふりの、寝息の男を無視するように、私は4割程日差しが入り込む、窓際のサッシの出っ張りへ、少し小さめの腰を置いた。

意外と安定感がある、もしかするとハルもこのような格好をしている事も、あるのだろうかと思慮する。

どうやら、根競べか！

私は今夜の訪問を、どう切り出そうかまだ躊躇がある。

一瞬だが、あの当時の記憶が蘇る。いつも、私が負ける。

この場で、私はまだ動けない。

ハルは勘も感性も鋭い。

当然だろう、芸術家だものね・・・

どう動けば彼のプライドが守れる。

変に気を使うと、ハルの機嫌を損ねる。

職員達の舌打ちを引き起こし、院長に問題提起を引き起こしたなら、必ずその動機に気づく事は予想出来ただろう。

案の定、企みは大成功となった。

そして、今私はハルの枕元に引つ張り出され、現実ここに居る。彼の芝居じみた問題行動が、死を恐れての情緒不安定等では、決して無いと、しっかり理解した上で、私はのこのこの場所へや

つて来た。

目を閉じて、寝たふりの男の顔から視線をそらしている彼に、声をかけるか体に触れるか思案中の私に、やつが動いた。

今日は私の勝ち！なんてもうそんな悠長な行動は限界よね！

目を開け、彼は限界ギリギリの笑顔で「やあ！」と言。

私は泣かない！涙は見せない、決して・・・

「元気！」と、医者に似つかわしくない間抜けな返事を返した。

「馬鹿か・・・オマエ・・・相変わらず！」

私の計算どおりの答えに・・・

よかった、会話が繋がった。

泣かないよ、顔も心も！

「だって、ハルを見ると昔に戻るから・・・」

「そうか・・・！」

あれ・・・やはり反応が柔らかすぎる、私の知るいつものハルと！

私は耐え切れず、ハルの居住スペースを離れ、

庭に出られるドアに向かった。

耐えられない、いつもの患者ではない。

見慣れたはずのいつものシーン、しかしどうしても心が動く、

動かされるから逃げた。

その場から・・・

後ろから、ハルの足音が・・・

抱かれる・・・背中を・・・

抱きしめられる・・・、

背中から私の首に巻かれる！

ハルの繊細な動きを見せる両腕で・・・

来る！？

足音が・・・感じる、背中で
熱くなる。・・・体中が・・・

違った。

抱かれなかった。

抱いて欲しかったのに・・・

ハルの・・・バカ！

C a p - 1 7 F i n

では、後ほど 浅見 希

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9741z/>

女医の彼（改編）

2011年12月31日04時53分発行